

平成30年度 第61回 関東高校サッカー大会県予選 大会総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

4月14日から30日にかけて平成30年度関東高校サッカー大会埼玉県予選が開催された。この大会は1月に行われた新人大会各支部予選上位の24チームに昨年度の全国高校サッカー選手権大会埼玉県予選でベスト8まで勝ち残ったチームを合わせた計32チームによるトーナメント方式で実施された。優勝は成徳深谷高校、準優勝に立教新座高校、3位に浦和南高校と浦和東高校となり、新人戦に続き2冠を達成した成徳深谷高校が第1代表として、立教新座高校が第2代表として6月1日から群馬県で開催される関東大会への出場権を獲得した。

優勝した成徳深谷高校は1-4-2-3-1のシステムを採用し、常に相手DFラインの背後を突く意識が強いことが特徴であった。特にFWの⑮戸澤が豊富な運動量で幾度となくペナルティエリア脇のスペースに走り込んで起点を作り、それにサイドハーフとトップ下が素早く絡むことで攻撃に厚みを持たせようという意図が感じられた。攻撃に関してはロングスローも相手の脅威となっており、実際に決勝では②長谷のロングスローの混戦から獲得したPKが決勝点となった。チーム全体の守備意識が非常に高く、最終ラインを高く保って3ラインをコンパクトにし、前線からプレッシャーを掛けやすくして相手攻撃の選択肢を限定しながら、縦パスに対しては後ろ4人のDFがチャレンジ&カバーを明確にして攻撃の芽を潰していた。特にCB2人の安定感があり、相手ハイボールを跳ね返す力強さには見ごたえがあった。この組織的な守備の完成度が新人戦5試合を通じて失点1に留まった大きな理由であると考えられる。課題としては、攻撃のバリエーションを高めなければいけないと感じた。決勝の相手である立教新座高校が5バックの布陣を敷いてペナルティエリア脇のスペースを埋めてきたこともあり、攻めあぐねるシーンが多いように感じた。使いたいエリアのスペースが埋められているなかで、チームとして他の選択肢が増えればなお攻撃力が増すのではないだろうか。

準優勝となった立教新座高校は1-4-4-2や1-4-2-3-1、決勝では1-5-4-1と、相手や状況に応じて頻りにシステムを使い分けていた。選手に関しても⑪細田や⑭南口が試合によってDFラインに入ったり、FWとして起用されたりと、柔軟性が持ち味のチームであった。攻撃は⑪細田や⑭南口がターゲットになって⑧庭田が前向きで仕事をする形と、両ワイドの⑦新谷(左)⑱渡邊(右)による鋭い仕掛けから中央の選手がアクションを起こして攻撃のスイッチが入る2つのパターンが多かった。DFが攻撃参加をすることは少ないが、距離感が良く、1試合通じて高い集中力をもって粘り強い守備ができていた。また、今大会怪我による途中出場が多かった⑩稲垣に関してはFWとしての突破力、力強さ、メンタルを持ち合わせており、万全の状態で見ることが出来なかったことが惜しまれる。決勝では成徳深谷のストロングポイントを消すために5バックを敷いたためか、全体のポジショニングが後ろぎみになり前線の⑦新谷、⑱渡邊、⑩稲垣との距離が長くなったことでサポートが間に合わない場面が多く見られた。

3位になった浦和東高校は1-4-4-2のシンプルな3ラインを形成する全員の守備意識が高いチームであった。距離感を狭めてスペースを潰し、ボールを奪ってから縦への意識を強め、早いタイミングでターゲットの⑩小川にボールを配給して攻撃のスイッチを入れる場面が多かった。攻撃では⑳志村による精度の高い多様なキックによるFKが魅力的であった。

同じく3位となった浦和南高校は相手に応じて1-4-1-2-3や1-4-4-2を使い分けるシステムをとっていた。攻撃のスタイルも大きく2つに分類できる。それは両サイドバックが高い位置を取りながら中央にできるスペースを3枚のインサイドハーフが使って組み立てる試合と、シンプルに相手DFの背後にボールを入れてからプレスをかける試合である。十分に相手チームの分析を行い、チームとしての戦い方の意思統一が図られている印象をうけた。攻撃のスタイルは試合ごとに変容したが、全試合を通じて守備意識が高く、特にハイボールと球際のフィジカル面での強さが際立っていた。それは4試合で失点2という結果にも表れている。

今大会は新人戦同様にチーム全体の守備意識が高く、かつ個々の選手が力強く球際の勝負に勝てるチームが上位に進んだ。上位チームは総じてファーストDFが強い規制をかけて周囲が連動してスペースを潰しながら奪う形が出来ている。一方で組織的な守備という部分ではまだ多くのチームが発展途上であり、横ズレ・縦ズレ、ボールから距離のある選手に対する中間ポジションの取り方など精度が高まってくるとより堅固な守備網ができるはずである。

関東大会出場権を獲得した2チームは対照的である。経験を積んできた3年生が主体で予選を通じて自分たちの「カタチ」を変えなかった成徳深谷高校と、登録メンバーの半数以上が2年生以下で試合ごとに柔軟性を見せてきた立教新座高校。両チームとも埼玉県代表として良い結果を残すとともに今後につながる貴重な経験を積んでもらうことに期待したい。